

## 論文概要

### 増野悦興研究 ―あるキリスト者・教育者の生涯と思想―

滝澤民夫

#### 問題の所在

本論文で取り上げる増野悦興（一八六五―一九一二）は、幕末に津和野藩士の子として生まれ、漢学と国学の訓育のもとに生育し、キリスト教との出会い・入信のなかで、同志社英学校と地方伝道を経て北米修学し、帰国後に理性と信仰の葛藤を体験し、教育界へと進み、やがてキリスト教倫理と道徳による人格の完成を青年に託した。そうした現世の打算ではなく、より善く生きる人生の希求は、人は何のために生きるのか、さらにはどこに向かうのか、という今日にも通じる普遍的な問いかけである。

増野のキリスト教信仰は当時の主流派プロテスタントキリスト教界からは「異端」とみなされていた。一八九〇年前後に流入した、聖書無謬説や三位一体説を否定し、キリスト人間論を説くユニテリアンなどの、いわゆる新神学に与したとされたためである。そうした新神学に流れた青年教徒のうち、増野が尊敬していた金森通倫・横井時雄らはキリスト教から離れ、終生の友となった村井知至・安部磯雄・岸本能武太らは社会主義運動を牽引していった。そのなかで増野は主流派プロテスタントキリスト教とは訣別したが、ユニバーサリストの教役者として信仰を貫き、短い生涯を終えた。

プロテスタントキリスト教の主流から外れ、政治参画や社会主義運動からも距離を置いて、キリスト教による青年の人格形成を社会改革の主眼とした増野は、理性と信仰の共存を悩みながら希求し、信仰に生きた。増野の足跡は華やかではない。しかし、近代の日本におけるキリスト教信仰の流入の過程を考察する際に、そうした「異端」とされた少数者のキリスト教思想・信仰の意味を問うことは、宗教や思想の在り方を考えるうえで重要である。

こうした問題意識から、本論文では物質的価値ではない精神的価値を求める生き方を宗教と教育を通して未来に託し、不遇のまま埋もれてきた増野の生涯と思想を明らかにしたい。その問題意識と手順は以下のように整理できる。

これまで、主として代表的思想家を中心に取り上げられてきた日本の近代キリスト教思想史に対して、増野悦興のような異端者ないし少数派を取り上げること、近代日本のキリスト教思想の多様性、奥行きを広さを浮かび上がらせることができると考えられる。

特に、そのことは具体的には二つの面において意義がある。第一にプロテスタントキリスト教思想の受容の側面においてである。これまで、儒教などの伝統思想との対峙という観点から論じられてきたプロテスタントキリスト教思想受容史に対して、贖罪意識が希薄な日本的な受容と独自のプロテスタントキリスト教神学確立への模索という思想形成を遂

げた増野を検討することで、これまでの日本のキリスト教、特にプロテスタントキリスト教思想史において看過されてきた、贖罪意識が希薄な日本的な受容と独自のプロテスタントキリスト教神学確立への模索という思想形成を遂げた事例を明らかにできる。

第二に、これまで天皇制国家主義との対峙あるいは妥協という位置付けで語られることが多かった日本のプロテスタントキリスト教思想史に対してである。主流派への妥協ではない確固たるプロテスタントキリスト教信仰を維持しつつ、天皇制国家主義との並立の可能性を主張していた増野の思想を、天皇制国家主義との対峙あるいは妥協ということのみでは片づけられない日本のプロテスタントキリスト教思想の一つの新しい類型として検討することの意味は大きい。

### 本論文の論点と整理

第Ⅰ部「日本の近代化と地方青年」では、津和野時代から大阪基督教徒青年会時代までを対象とした。第一章「津和野時代から東京時代」、第二章「同志社英学校時代」、第三章「日向高鍋教会時代」、第四章「大阪基督教徒青年会時代」においては、幼少期の人格形成、父増野貞吉のこと、師新島襄との出会い、日向高鍋伝道と岡山孤児院を創設して最大時一二〇〇人もの貧窮年少者の救済と自立に生涯をかけた石井十次との出会い、大阪基督教徒青年会時代の『基督教青年』誌の編輯などの実際を明らかにした。なお、補論として四国の多度津藩の次席家老の娘として生まれた妻咲子と家族の数奇な半生、及び大阪基督教徒青年会と十津川大水災についても言及した。また、本論文とは別に筆者は調査過程で遺族から提供を受けた『基督教青年』誌を復刻刊行し、資料提供ができた。『基督教青年』により、一八八〇年代末から一八九〇年代初頭の関西・中国地方のキリスト教青年会運動の動向を明らかにした。

第Ⅱ部「文明」の撰取と地方青年」では、北米修学時代から靈南坂教会・安中教会牧師時代を、さらに地方での中学校教員時代を対象とした。第五章「北米修学時代」、第六章「靈南坂教会・安中教会時代」においては、北米修学直前の伝道活動、ニューイングランドのマサチューセッツ州ボストンのアンドバー神学校からメイン州バンゴアのバンゴア神学校での修学、帰国後の講演・執筆、牧師としての活動の実際と『基督教新聞』『六合雑誌』『教理講話』などで増野悦興が主張したキリスト教認識と信仰について論じた。なかでも、「信仰の実験」論は増野のキリスト教論の核心にあたるもので、当時の世界的な新神学界の組織神学論を初めて本格的に受容・紹介・流布しようとした試みとして、本流にはなりきれなかったものの、近代日本の知識人が、キリスト教を信仰のみならず教理面から内面化しようとした試みとして高く評価できる。また、ここでは同時代人としての北村透谷・岸本能武太のプロテスタントキリスト教認識と信仰との比較も行った。めまぐるしく時勢や文明観が変転した近代化のなかで、武士階級出身の知識青年はさまざまな形でキリスト教を受容してゆく。本論文ではその錯綜した複雑で多様な受容、挫折過程の一端を日本近代の宗教史・思想史に位置づけようと試みた。さらに、これまでの思想史の系譜では、北村透谷(内部生命論)から西田幾多郎(『善の研究』)の流れが論じられてきたが、その間に増野悦興(信仰の実験論)が位置づけられるとの問題提起をした。第七章「中学校教員時代」では、キリスト教界から教育界への転身の経過と地域での青年教育実践の実際を明らかにした。増野悦興の教育活動が新島襄の遺志の体现でもあり、精神としては間接的キリスト教伝道であったこと、方法としては同志社と北米で習得した「自由自治自活」の精神の涵養

による人格の完成を目指したものであったことが明らかになった。

第Ⅲ部「故郷の喪失と近代化への懷疑」では、『成民』誌発刊から『高貴なる人格』刊行へと向かう晩年と家族のその後、自由派基督教徒(ユニバーサリスト)としての日本同仁基督教会牧師時代を対象とした。第八章「成民会時代から日本同仁基督教会時代」、第九章「臨終前後」では、瑞豊塾の開設・成民会の設立・丁酉倫理会での活動、日本同仁基督教会牧師在任中の飯田町教会での活動と秋田伝道の実際を検討し、従来詳しく論じられてこなかった中学校長退職後の東京での自由派基督教徒(ユニバーサリスト)としての活動と講演録・執筆活動の内容を明らかにした。さらに、臨終前後の倫理主義と言信一致に関して、晩年の著作『高貴なる人格』への思いとその内実を検討した。その上で、川越中学校第一回卒業生岡田恒輔が編集・刊行した遺稿集『筆華舌英』でのキリスト教信仰・国民道德論・女子教育論の実際とその宗教史・思想史・中等教育史上における意義を検討した。

### 増野悦興の遺したもの

#### ① プロテスタントキリスト教の受容から定着へ

プロテスタントキリスト教の受容から定着への過程は第六章第二節で検討したが、第一段階として、①「敬神」観念から横滑りした入信と伝道活動、②渡米後、自身の信仰内実の薄さへの自覚とキリスト教組織神学論の学修、③キリスト教の真理は心霊的生命にあるとの確信(「教勢振起策と新神学」一八九一年)、④聖書そのものの実価から聖書を信仰、⑤理性を満足させる合理性がキリスト中心の新神学、⑦『神学原論』を「神権の源」「基督論」「信仰の実験を論ず」として構想、⑧キリスト教の三基礎は、イエスキリスト・信仰の実験・理性、⑨智・情・意の三能力を働かせて無形世界を観察し、実在するものを実在と悟る信仰の実験の重視と、聖書の批評的研究の必要性、⑩信仰の実験とは、キリストの示す宗教道德的「真」と理性が割り当てる「理」を調査し、「宗教道德的真理」を作る瞬間に、救い主キリストを受け、キリストを真似ることによりキリストの意識に達することで、これを「我を救い得ることを実験す」(「基督論下」一八九五年)という、⑪有心的存在者の実在が信仰の実験の中心点で、これを霊なる神、父の神、甦ったキリスト、聖霊などといい、「天」「霊」「仏」なども実態につけられた名称(「信仰の実験を論ず」一八九六年)である、と増野は考えるに至った。

こうして体系化して捉えられた増野のキリスト教教理の特徴は、要するに神霊的生命・理性・真理・信仰の実験の重視である。ここである神霊的生命(spiritual life)は神霊的実在(spiritual reality)「ハート」であり、その生命を宿す有心的存在者が霊なる神(personal God)・父の神(fatherhood of God)・甦ったキリスト・聖霊とされる。したがって、キリスト教の教理である神学は神霊的生命を成長させるとともに理性「ヘッド」を満足させるものでなくてはならない。そして、神徳を持つ人間キリストの示す宗教道德的「真」と我が理性の「理」の調査が「宗教道德的真理」である。その宗教道德的真理が造られた瞬間に救済されうることを実験(実践修養)することが信仰の実験である。信仰の実験は、確実的知識は、神霊界の中心の神霊を官能を働かせて知ること、それにより人は自己存在が有形世界だけでなく無形世界にも在ることを知る。したがって、信仰の実験の重視がキリスト教を活性化させる。この増野悦興の論理の際立つ特徴は、神徳を持つ人間キリストの示す宗教道德的「真」と我が理性の「理」の調査が「宗教道德的真理」であるとした点にあり、これが一八九六年時点で増野悦興が構想した『神学原論』であった。

増野は聖書無謬論を否定し、神霊的実在と理性の共存を求め、キリスト人間論を確信し、聖書やキリストを通して宗教道徳的真理を体得する信仰的実験こそがキリスト教教理の本質だと考えた。信仰の実験により神格と人格が結びつき、無形と有形の世界が共立すると主張したのだが、「神徳を持つ人間キリスト」や「我が理性」の強調は、従来の福音派や組合教会には絶対を受け入れられない論理で、その主張は新神学(ユニテリアン)一派とみなされて排除された。けれども、外来のキリスト教信仰を受容するに際して、盲目的に入信する人びとが多かった時代に、そのよって立つ宗教教理を理性的に解釈して内面化しようとした真摯な姿勢こそは、日本近代の宗教史・思想史上に記録として留めておく必要がある。

霊南坂教会・安中教会の牧師職を自ら去り、新たに教育界で青年教育に邁進したのもつかの間、結局、埼玉県立川越中学校校長職を辞した増野は、やがて自由派基督教(ユニバーサルizm)の「ユニヴァサル、ブラザーフッド(万人同胞)とユニヴァサル、ファザーフッド(神は万人の父)」とする信仰である万人救済の教理に惹かれてゆき、日本同仁基督教会の教理「吾人の信条」をまとめることになった。一八九六年に構想した『神学原論』で主張した信仰の実験論を「吾人の信条」において、「聖書の性質救主の人格等に関する合理的思想」として残したうえで、「ファザーフッド(神は万人の父たること)」を掲げてキリスト教を万人救済の使命を持つ、さらに開かれた世界宗教として位置づけたのである。

日本同仁基督教会の飯田町教会牧師としての日常と並行して取り組まれた成民会の活動のなかで、さらに増野は儒教などへの回帰を主張するようになる。この第三段階では、一九〇八年一月の「孔子教会員としての予が立場」(『成民』第三卷第三号)で、武士道の教養を受けた日本人で基督教を奉ずる者は儒教的基督教徒の特色を持ち、道徳の絶対權威を信じるので、道の本源は天に在りという儒教の信仰を重視するとしている。ここでの主張の特色は、「儒教の畏天と我邦固有の敬神との契合点は、基督教の愛神との契合点」であるとする論理である。増野は儒教の畏天Ⅱ我邦固有の敬神Ⅱ基督教の愛神と考えて、我邦固有の敬神が両者を契合させ、さらに補完させ、教徒の品性Ⅱ人格を高めるとして、これが儒教的基督教徒だと主張した。

死の前年の一九一〇年に『高貴なる人格』を刊行した増野は、自由派神学(ユニバーサルizm)論を確信しつつ、イスラム教への視野は無いものの、儒教や仏教をも宗教として受容し、正統派キリスト教への対決姿勢をより鮮明にした。キリスト教を相対化して絶対者である「神から出る真を心に確信」することを善としたうえで、信仰とは不善から善への移行であり、言真一致こそが宗教者・教育者としての人格Ⅱ「現に確乎たる信念に由り動きつゝある、或るもの」の修養だと述べている。日本精神の真髓とされた「敬神の念」への回帰が、青年期を武士道的儒教道徳のもとで生育した知識層世代の一人である増野悦興のキリスト教受容の帰結でもあった。在来宗教や思想とプロテスタントキリスト教の教理とのはざまで、その整合性の統一に苦心したのである。

増野は、人類の父である神はキリスト教徒のみならず万人を救済するとするユニバーサルizmの立場から、偏狭な国家主義を相対化する視点を持つことはできたが、同時に勤皇精神に回帰して「我邦固有の敬神の念」の発露を教育勅語にみて、神と天皇は対立する概念ではなく、日本魂に人類愛的に契合されるものとした。少数派ではあったが、これも日本近代におけるキリスト教受容の一形態であった。プロテスタントキリスト教の受容と人



びとへの定着に向けて、煩悶した増野悦興が提起したキリスト教神学論(新神学)や、教育者としての生涯と思想の本格的検討は、当時の知識人が混乱する時代状況のなかで、人びとの道徳や宗教の将来をどのように描こうとしていたのかという点でも価値がある。

## ② 国民道徳論と青年教育論・女子教育論の実際

遺稿集『筆華舌英』については第九章第四節で検討したが、これは晩年の修養・道徳・教育・信仰論で、遺言ともいえる青年男女への国民道徳確立の呼びかけであった。時代の悪風潮に青年男女が翻弄されている現実に対して、増野は旧弊陋習と風紀紊乱の事実を取り上げて、品行方正な若者の育成のためには、風俗・思想の取り締まり強化や偏狭な愛国主義の鼓吹ではなく、女子の高等教育も含めた積極的教育・道徳的修養と宗教的信仰による靈性の開発が必要だと説き、智徳の錬磨と実践とを結びつけた国民道徳の確立を主張した。

増野がこだわったのは人びとに品行方正を求め、修養を通して国民道徳を確立する真正の生き方であった。そのためには、忠君愛国だけではなく虚言を恥じる良心の批判が大切であり、打算的な功利主義だけでは道徳の基礎としては不完全で、まして青年だけに品行方正の責務を負わせられないと主張した。さらに女子教育においても女子の自覚と知識の進展のために女性解放を制限することなく、道徳の修養と宗教的信仰による靈性の開発こそが必要だとした。その場合の靈性とは具体的には貞淑や良妻賢母とされ、その骨子真髓が論語の「殺身成仁」だと主張した。そして、この「己を捨てて他の利益を計る」精神は学校教育での徳育で涵養されるとした。良妻賢母主義を至当とみなしていた増野は平塚らいてうやノラなどの「新しい女」が脚光を浴びる時代風潮には理解を示さなかったが、積極的な女子教育の必要性を主張していた。

特徴的なのは、①国民道徳を論じるに当たり、「真の道徳は自由の空気の中で成長し、真の自由は道徳をともなつて健全な発達をする」として、道徳と自由の関係を補完的に捉えていること、②近代化の実現に際して五カ条誓文に理想を求めてではあったが、女子教育や修養に関し一貫して前向きな「開国進取」の精神を世人に求め、青年男女には失敗を恐れずに、ひたむきな努力による将来への挑戦を求めていること、③女子教育と女性解放の制限論を否定したうえで、道徳の修養と宗教的信仰による靈性の開発の勧めにおいて、靈性を貞淑や良妻賢母と捉えてその本質を論語の「殺身成仁」だと主張し、さらにその「己を捨てて他の利益を計る」精神を「犠牲」に置換して聖書の「靈的施与」として同列視していることである。ここでも増野は『高貴なる人格』で展開したキリスト教論と同じく、修養・道徳・教育・信仰論において「人事を尽くして天命を俟つ」という形で儒教と基督教の統一的把握をしている。

そのうえで青年男女に対して、道徳上の過失を悔悟して煩悶する人の不義は天のみが責めたり免じたりでき、弱者への慰藉の根本は己がどのような信仰によって艱難辛苦を乗り越えて行くかを告げることだとして、自己省察や歴史上の義人からも学んで孤独にならないようにと呼びかけたのである。

第九章第一節で検討したように、一九一〇年に刊行した『高貴なる人格』がキリスト教と日本魂の契合に力点を置いて、自己の信念と信仰の確立を確認する書であったのに対して、『筆華舌英』は青年男女に対する修養と信仰の確立のための指針の書という性格を持っていた。同時に両者は、万人救済と青年自立による国民道徳の確立という点で補完的な性

格を併せ持つ、宗教論・教育論かつ道德論であった。

### 本論文の成果

日本の近代化過程において、旧来の儒教・国学の教育を受け、仏教の素養を身につけて生育した武士階級出身の青年知識人にとって、外来のプロテスタントキリスト教を受容し、信仰によって人生を開くことは多大な精神的相克をもたらした。青年の人格形成に当たり、人格という概念も未形成であった一八八〇年代の日本において、旧来の宗教・思想・教育の改変にあたって、大半の青年が大きな煩悶や苦悩、試練を自己の内面で整合化しながらキリスト教信仰を確立していった。

したがって、その信仰の在り方も多様であったが、本論文により判明したのは、増野悦興ほどキリスト教教理と信仰に関してつき詰めて、理性と信仰心の関係を教理研究（組織神学論）から論理づけようとした例は稀有であったという事実である。当時プロテスタントキリスト教各派の宣教師によって日本にもたらされたキリスト教信仰の大半は、三位一体説と聖書無誤謬論の教理を自明のものとして疑わないルター以来の保守的なプロテスタントキリスト教信仰であった。そのなかで、理性を重んじるドイツ新神学を受け入れたアンドバー神学校・ハーバード神学校などで隆盛したユニテリアン派の新神学が唱えられた。けれども、新神学は日本のキリスト教界では一過性の熱狂として消失していった。この時期に、北米での三年間の修学を終えて帰国し、キリストの神性を否定してキリスト人間論を主張した増野悦興は、主流派からは異端とされながらも、ユニテリアンよりもさらに大衆的な信仰である自由派基督教（ユニバーサリズムキリスト教）を受容し、「万人救済」・「万人同胞」の理論的根拠を旧来の日本精神に求めて、「吾人の信条」として世に問い、日本人の国民道德確立の根本に信仰心確立をすすめることの必要性を主張した。

このような増野悦興の信仰的・精神的営為は、日本人の宗教信仰とは何であり、日本人にとり唯一神と多神との関係はどう統一的に認識され、信仰心と結びつくのかという、宗教・思想・倫理・教育の問題を根本的に問いかけた点で評価しなければならないと筆者は考える。さらに、同志社英学校での新島襄との出会い以来、伝道と教育を広い意味で人格者形成の方途として捉えた教育者としての、埼玉県立川越中学校長時代の青年教育実践は、「自由自治自活」の精神の涵養を目指して、限らない青年への信頼と期待を託した自立に向けた人格教育であった。これは近代化の過程で貫かれる国家主義的な臣民教育に対して、大正自由教育が主張される以前の、世界人類の救済という視点から文明を相対的に捉える画期的な教育的営為であり、このことも評価されるべきであると筆者は考える。

死の前年の一九一〇年に刊行された『高貴なる人格』と、一九二〇年に刊行された『筆華舌英』に象徴されるように、増野悦興は人格の完成と国民道德の確立を希求し続けた。これは日本近代のキリスト教知識人にとって、ある意味では共通の課題でもあった。その場合に、彼等にとつての自我の確立・人格の形成や個人の尊厳の確認は、国家との関わり抜きでは論じられない。そうした点で、天皇制国家体制と神の存在を矛盾したものとして捉えることなく、両者を「敬天」「敬神」の対象と考え、皇室を尊崇する愛国者でもあった。一過性の入信者が多いなかで、増野悦興は日本の伝統的宗教・思想とプロテスタントキリスト教の「契合」という形で両者を受容した特異なキリスト者・教育者であった。

以上が本論文の概要である。